

▼コラム

ウィズコロナとアフターコロナの一考察（補遺） ～まとめに代えて：心をよぎる「五つの不安」～

シビルNPO 連携プラットフォーム 個人正会員
有岡 正樹



本 CNCP 通信 Vol.80～Vol.83 に「ウィズコロナとアフターコロナの一考察」と題し、（その1）～（その4：最終回）を連載しました。新型コロナウイルスの感染拡大抑制政策に関連して、その3つの基本的な数値である、感染者（陽性者）数、PCR 検査受検者数およびその比である陽性率につき私見として、その関連性を述べています。その背景には、今回のコロナ禍は Covid-19 と称され、WHO によりパンデミック宣言がなされた歴史的な事象であり、その収まり方によっては、世界のあり方を根本的に変えていく可能性を有する事象であると、地球上の人類が顧慮し始めていることがあります。

1. 心をよぎる「五つの不安」

昨年2月から日本の感染拡大について、意識的に状況を把握、理解し、NPO 活動仲間との意見交換につとめ、また海外についても、その対応の先進国である豪州やニュージーランドの知人と交流し、コロナ情報を集め勉強しました。その過程で、世界の覇権問題や日本の国力にまで関心が及び、それらを取りまとめ NPO 関係者や研究仲間、大学の友人などに、メールで配信したりしてきました。

それが標記のウィズコロナに関するテーマですが、その過程で思考を重ねるうちに、世界のあり方を根本的に変えていく可能性のある以下5つの事象が、日増しに心を占めていくようになりました。新年からはこの「5つの不安」について、些末であっても自分なりの思いを心してみることにしました。

(1) 医療崩壊の危機：世界が注目する安全・安心のインバウンド国「日本」の真髄は？

これまで述べてきた感染者数の拡大以上に、いまひとつの大きな課題として重症者の増加に対応する専用病院および医療従事者の不足がある。これはコロナ感染患者だけでなく、常態医療にも大きな影響を与えて国民の命に関わることという意味で「医療崩壊」と称されて、最近とみにマスコミの俎上に上る問題である。一つのメルクマールとしては、感染重症者及び死者の抑制とそのリスク対応という、いわゆる具体的な対応策だが、これにも後手、後手に回っている。

(2) コロナ禍対応財政と経済回復の問題：‘鈍すりゃ貧する’での経済破綻は？

昨年日経11月19日版で、「日本は、コロナ対策費が、GDP 比率で主要7カ国中最高水準の42%であるのに対し、独伊30%台、英仏加は20%台、米ではなんと日本の1/3弱の15%」との記事があった。オーストラリアのニュース番組では、豪州やNZは感染者ゼロを目指して完璧を期す政策をとっているが、一方では flattening（平準化）という低位安定型というのも一つの戦略であると、付け加えていた。日本は後者で、東日本大震災津波災害の復興対策提言の際も痛感したが、縦割り行政と前歴主義によるリスクの先送り体質を再認している。その方が財政的負担の大きいことも併せて……。

20年度の債務残高はGDPの2.16倍の1160兆円で、2025年には赤字脱出をとともくろんでいた基礎的財政収支（プライマリーバランス）が、コロナ対応歳出などで、昨年度の4倍以上の70兆円弱に膨れ上がっている。今後のコロナ禍の拡大でのさらなる悪化もあり、予断を許さない。

(3) どちらも大事な2つの事象：80年周期の振り子はいつ反転するのか？

ワクチンや感染症医療薬といった医科学的な対処法が確立されるまでは、ウイルスとの共存で平衡（横ばい）状態を維持して、経済の劣化を回復可能レベルに保つという、「どちらも大事」という政策を続けていくというのが日本人の国民性のようである。第3次世界大戦とも揶揄される今回の事態で、日本が当面の策として取ろうとしている低位安定による「なべ底」脱出戦略は、容易ではない。日本近代史80年周期という視点でわが国は、太平洋戦争敗戦という「負の極」で歴史の振り子を反転させたが、‘Japan as No.1’ と称された1980年代のピークを境に国力低下（下り坂）を続け、2度目の「負の極」からの反転が模索されていたさなかのコロナ禍である。前回は敗戦という一瞬の、しかも極限的事象による

振り子の反転であったが、今回はいわば負の「なべ底」で、それが日々積分されて累積されていく過程での、振り子の反転は容易ではない。今回のように「国民の健康」か「国の経済」といった質は違うが、重みとしてどちらも大事という事象の対応は不得手な民族である。振り子の反転が、負の積分値が限界を超えて財務破綻するのか、大都市での大災害が引き金になるのか、定かではない。

(4) 世界はどこに向かおうとしているのか？ そして日本は？：長すぎる日本の自転周期

最近では 2025 年を挟んでこれから 10 年ほどを、その 80 年前の戦前・戦後と重ね合わせてみることが多い。覇権かそれとも協調かの狭間でどこに落ち着くのか、コロナ問題は中国武漢市での発症に端を発して一気に世界に広がり、多くの事象に米中の覇権争いが絡んで混沌の様相を呈している。世界の再編はまさに波乱万丈の気配である。中国が政治的にも、経済的にも今回のコロナ禍を逆手にとって一人勝ちの様相を呈している中、米国の政権交代も絡んで日本もコロナ前に戻ることはありえないのだろうが、政治・外交は米国、経済は中国といった「どちらも大事」で押し通せるのか定かでない。様々な国々の多様な組合せで、多くの多国間組織が動き出している。地政学的に 4 つくらいの準覇権国体制というのもあり得るのかも知れない。振り子が「負の極」に振り切れる前に新しい方向を求めて、円錐的に反転し出すことを望みたい。短い期間で世界は変容していこう。その中で劣後せず、思い切って 40 年周期で自立・自転できる上位 10 位ぐらいの国「日本」をめざして・・・。

(5) 「D 字社会」をめざせるか？：どちらも大事な 2 つの ‘Social Capital’

新年の日経連載で宇沢弘文博士の社会的共通資本が取り上げられていた。彼が 2000 年に初版したその著では、‘ゆたかな経済生活を営み、すぐれた文化を展開し、人間的に魅力ある社会を安定的に維持することを可能にする社会的装置で、具体的には、森林・大気・水道・教育・報道・公園・病院など産業や生活にとって必要不可欠な社会的資本を示す’ とある。65 歳で土木技術者としての現役を退いて「社会資本ライフサイクル・マネジメント研究会(SLIM Japan)」という NPO 法人活動に関わってきた筆者には、アフターコロナ社会における「公共施設」というハード面と「社会関係資本」といふソフト面での、2 つのソーシャルキャピタルが相合わさっての多様性実現に関心が深い。コロナ禍を機に上位と下位に分断される「K 字社会」をどう「D 字社会」に改変していけるのか、新しい公共の担い手の役割は大きい。

2. 偶然の重なりは必然か？

私自身、昨年 3 月から日経、朝日両紙の記事見出しをアーカイブ整理することから始め、5 月からはそれらを、「コロナ禍関係記事見出しの内容別分類一覧表」として分析し、ウイズコロナの議論の参考にしてみました。

ただ、本来の目的であるアフターコロナの世界を、そしてこれからの日本を自分なりに顧慮し、心をよぎる「五つの不安」として思いを描いてみたいとの思いが強く、ウイズコロナについては、昨年未までの「感染者数と PCR 検査受検者数の関係」を中心にした検討結果を、CNCP 通信に昨年 12 月から今年の 3 月まで 4 回に分けて連載投稿することで終了とし、新年からはこの「五つの不安」に関連する記事見出しを、内容や記載項目などに層別して整理を始めております。この CNCP 通信の「ウイズコロナとアフターコロナの一考察」(その 1~4)をお読みいただいた方には、この「5 つの不安」の一つや二つは、認識を共有いただけるのではないかと考えております。

昨年はコロナ下でもあって、セミナーや研究会はほとんどオンラインでの意見交換でしたが、それが有用であることを再認識しました。‘気軽、かつ緩やかに’をベースに随時意見交換ができればと思っています。そのためには、記事見出しデータの共有が「最初の一步」だと思慮します。

ご関心ある方は、この CNCP 通信末尾の事務局通信にあるメールアドレスで事務局に、または筆者(arioka1010@gmail.com)に直接その旨連絡いただければと存じます。できれば CNCP の個人会員またはサポーターとして参画いただければ、元 NPO 法人理事としてうれしく存じます。

「5 つの不安」のいくつかを意見交換する、またこの機会に知己となれるといったことの、偶然の重なりが「正の必然」となりますよう、祈念しております。

日経・朝日両紙に見る記事見出し
日本、そして世界 これからどう変わるか

五つの不安	内容	記載項目
①コロナ禍 (ウイズ&アフター)	国内感染	感染症・伝染症
	世界動向	パンデミック
②経済・財政	市場・企業・資本 ・雇用・技術革新	国内経済 国際経済
	政治・制度	政治・国体・主義
③国内(為政者)	厚労省他行政 外郭団体・自治体	国内再編 行政・自治体 危機管理 (災害・資源・テロ)
	米国・中国	2大覇権国 (4大覇権国)
④国際関係	その他全般	国際協調 (機能的国際組織)
	Social Capital (社会・生活基盤)	社会関係資本 社会資本
⑤国民性・社会	民族(遺伝子)	教育・文化・歴史